＜報告＞

KAKEHASHIプロジェクト（The Bridge for Tomorrow）：北米地域との青少年交流事業に参加して

Brenda Hayashi
木　村　春　美
熊　谷　優　克
J.F. Morris
田　島　優　子
（アルファベット順）

KAKEHASHIプロジェクトは、日本に対する潜在的な関心を増進させ、訪日外国人の増加を図るとともに、日本ブランドへの国際理解を増進させることを目的として、我が国政府（外務省）が推進する青少年交流事業である。また相互理解の深化、将来の交流の担い手層のネットワーク形成並びに青少年層におけるグローバル人材の育成を推進するものである。本学は当プロジェクトに採択され、2013年11月１日から11月14日まで（仙台･成田間の移動日含み）、付添い教員２名と学生23名からなる交流事業団が、シカゴ、ロサンゼルス、サンフランシスコなどの大学、政府機関、地公体等を訪問し、プレゼンテーションやディスカッションなどを通して、広く北米の地域住民に向け、日本の情報発信を行うとともに交流に努めた。

本学としてはこのような大規模な公的海外派遣プログラムに採択され訪問活動を行ったことは初めての経験であった。そこで、本事業のあらましを記し、本学としてどのようにこの取り組みを行い、学生・教員たちが与えられたプロジェクト任務をどのように咀嚼して達成したかを概括しておくことは、今後のためにも、意義のあることと思われる。本稿の目的は、当プロジェクトの大まかな流れを紹介するとともに、学生・教員がそれぞれの課題にどのように対処したのか、参加学生達にどのような成長のプロセスがあったのかを明らかにすることにある。

１．当派遣プロジェクトの趣旨（熊谷）

本事業の案内が本学に届いたのは2013年６月17日のことであった。「日本経済の再生に向けて、青少年交流を通じて、我が国の強みや魅力等の日本ブランドや日本的「価値」（クール・ジャパン）に関する理解と関心を深めるために、日本政府（外務省）により進められている事業」とあり「全国から選抜された大学生が米国において日本の魅力等についての情報を発信し、国際的な視野を持った次世代の人材として成長するための経験を培うことを目的とする」と

あった。

この時点で明らかになっていたのは下記のような点であった。

・派遣期間：12日間

・派遣時期：調整中（2013年11月、2014年１月、３月を想定）

・費用：国内移動費、パスポート取得費用のみ自己負担、渡航費・宿泊費・食費・旅行傷害保険などは主催者負担

・プログラム実施関連機関

拠出先団体：日米教育委員会

主催：独立行政法人国際交流基金

（共催団体：米国・ローラシアン協会）

２．東日本大震災以降の本学の国際交流事業の現状（熊谷）

2011年の東日本大震災は本学に多大な人的、物的そして精神的な被害をもたらした。学部学生だけでも家屋全壊・半壊者数が459名に上り、学生のみならず保護者・世帯自身の新たなリスク負担能力は明らかに低下していた。本来留学にかかる女子学生のリスク許容度は男子学生に比べると高いはずであるが、リスク負担能力の低下は国際交流の分野にも少なからぬ影響をもたらした。震災以前は、常時15名前後の学生が提携校を中心に派遣されていたが、震災後はそれが半減した。また受入面においては、正規留学生、ならびに中国・韓国からの交換留学生の受け入れも途絶えたまま推移している。

３．本学にとっての当プロジェクトの意義（熊谷）

学生の留学や異文化交流の機会が減っている現状を踏まえ、本学としては、各種の震災支援プログラムに積極的に対応することとし、協定校、外国政府や在外篤志家などによる支援制度の下で留学の実現・推進に努めた。また公的交流プログラムにも積極的に対応していくこととした。

震災復興支援で本学を訪れた米国人学生達とのセミナーや懇談会を数次にわたって行うとともに、本学の学生の自主活動を支援するＭＧ-ＬＡＣ（宮城学院リエゾン・アクション・センター）においてキズナ強化プロジェクトで南アジア８カ国の青少年と防災をテーマに交流を行った。2013年３月に初めて総勢70名以上の訪日団を受入れ、交流会を成功裡に行い、本学の学生達は大きな成功体験を共有することになった。それとともに初めて国際交流委員会・国際交流センターがＭＧ-ＬＡＣと協同して活動するモデルケースにもなったという点で特筆すべきであろう。

従来このような国際交流プロジェクトはどうしても特定の学科の学生が中心となりがち（本

学の場合は国際文化学科や英文科の学生など）であったが、MG－ＬＡＣがボランティアの食品栄養学科の学生を中心に昼食（宗教上の理由による各種制限のなかで）を準備するなど、従来とは異なる学科の広がりを伴った、大学全体のイベントとして運営できたことが大きな成果であった。

この大規模プロジェクトに自信を得て2013年６月には、KAKEHASHI プロジェクトで来日した米国カリフォルニア州のリバーサイド市のコミュニティカレッジの学生や市民23名を本学に迎えた。これには、本学の学生も70名以上が参加し、身振り手振りを交えた交流風景が見られた。多くの参加学生が「外国の人に説明するほど、日本について余りにも知らなさすぎる自分に気が付いた」との感想を漏らしていたのが印象的であった。交流会の後でも、ＳＮＳを利用して個別に連絡・情報発信・交流を進める学生が多く見られた。

４．募集開始と応募申し込み（熊谷）

2013年６月にこの派遣プロジェクトの概要が示された時点では、実施時期は不明であり、応募多数の場合は13名一組での派遣もありうるという状況であった。しかし国際交流委員会の取り組みは最初から、「不確定要素が多いが、そもそも本学が採択されるかは全く判らないことなのであるから、とにかくこの機会を逃さず絶対応募する」、「派遣時期としては一番早い11月、募集人員は最大の23名を想定して募集する」という極めて明確なものであった。その時の学内の共通認識としては7月22日が大学としての応募申込書の提出期限であることから、7月11日までには学生募集を終える必要があるということであった。

前述の大規模プロジェクトの受入経験をふまえ、募集の窓口はMG－ＬＡＣとし、全学生に一斉メールを発信する形で募集を行った。学生募集に際して留意したことは、ある程度の英語力があること、日本あるいは宮城県の魅力や強みについて発信したいものがあること、派遣後この経験をどのような形で生かしていくかが明確であること、派遣事業を全うできる団体行動をとれることの４点であった。

23名の派遣を想定すると、１チーム５名で４～５チームの組成が想定された。募集に際しては、チームごとに応募させれば、その後のチーム運営が容易になると想定されたが、今回はあえて個人毎の選定にこだわり、人物本位で選び、その後にチームを組成することを確認した。この時点で応募者は111名となり、大学として申請可能な状況となった。

５．大学としての応募申し込み（熊谷）

2013年７月23日の大学としての応募申込書提出に際しては、日本の魅力として、地方の魅力と多様性を訴えたいこと、全学科をあげた参加型のプレゼンテーションにより、食・ライフスタイル・ファッションを含む当地の独特な魅力を一体的に発信したいこと、また我々が真摯に

復興に取り組んでいること、海外からの支援に対して感謝を表明したいこと、復興プロセスと現状を積極的に発信したいことを主張した。本学が派遣校（実施時期11月１日から14日）として採択内定の連絡があったのは2013年９月４日のことであった。

６．第一次選考（熊谷）

本プロジェクトの難しさは派遣校として採択されるかどうかに拘わらず、チームの組成と準備を並行して進めなければならない点にあった。英語力よりも、むしろ何を発信できるかという点を重視して、全学に広く公募した段階で相当数の応募者になるであろうことは推測できた。採用内定の報を受け早速応募者の111名から第一次合格者60名の選定を開始した。選考は予め応募者が提出していた「応募動機と抱負」「どのようなことを発信したいのか、方法を含め具体的に述べよ」という２問の課題に対する回答を基に国際交流委員会において行った。紋切り型の回答がまずふるいにかけられ、最終的には視点がユニークで発信したいものが明確であった60名が選ばれた。

その後の進め方として、当初は国際文化学科、英文学科等の英語教育に携わる教員を中心に、出発までに10数回にわたる予備授業を行い、その中でプレゼンテーションの完成度などを総合的に評価した上で、最終23名を選抜するという方針であった。しかし、この方針は再検討せざるを得なくなった。11月には渡米するとなると、最初から23名を選抜し、プレゼンテーションのテーマ選定とチーム編成を行う方が現実的と思われた。

７．第２次審査（田島）

第１次書面審査に合格した60名のうち、出発までの予備授業に参加可能とした44名の学生が、９月17日に第２次審査に臨んだ。一人あたりの持ち時間は５分で、英語によるプレゼンテーションとした。審査会場を２部屋設け、第１会場ではハヤシと田島が、第２会場では熊谷と木村が、審査を担当した。

審査を行った際の主要な問題点としてあげられるのは、プレゼンテーションをする学生の準備不足や不慣れが目立ったということだった。短い期間で発表原稿を英語で作成しなければならなかったことがその一因であったようには思われるが、言語上の問題を抜きにしても、完成度の高いプレゼンテーションをできた学生は多くなかった。例えば、聞き手に内容を「伝える」ということに意識が及ばず、話していることが伝わってこない学生や、オリジナリティに欠けていたり、内容が深みに欠けたり、そもそものテーマ設定に問題があるような学生も多くみられた。中には抜きん出て優秀であった発表者も一部いたが、ほとんどの学生がプレゼンテーションに不慣れであるという状況にあって評価に大差はなく、その中から約半数の選考通過者を選び出すということはいささか困難であった。

今回のプロジェクト参加者の選抜はかなり時間が限られていたため仕方のないことではあったが、理想としては、第２次審査の前に学生に対して多少のプレゼンテーション指導を行うことができればよかったように思う。上で述べた、発表を行う上での基本的な欠点の中には、少しでも指導をすれば大幅に改善できたであろうものも多くあり、指摘を受ければそれを聞き入れて改善しようという意欲と素直さを持っている本学の学生の特質を考慮に入れれば、ある程度の指導をした上で、しっかりと準備されたプレゼンテーションを審査するほうが望ましいように思われた。

また技術的なことに関して言えば、学生がUSBやパワーポイントを上手く操作できずに審査に時間がかかるケースや、USBがパソコンに読み取られなかったために、準備してきたものを使用せずに学生がプレゼンテーションをすることになったケースもあった。審査において学生が本領を発揮できなかった可能性があったということは、今後の改善が求められる点であった。

８．チーム編制とテーマ選定（ハヤシ）

国際交流センター主任１名（熊谷）、付き添い教員２名（ハヤシ･木村）および第２次審査を通過した学生23名（英文学科11人、国際文化学科８人、音楽家２人、日本文学学科１人、発達臨床学科１人）が９月20日に放課後大学で集まった。ここで学生達にはアメリカで行うプレゼンテーションがグループ単位となることが告げられた。またその２日前に行なわれたプレゼンテーションに基づいて、学生は４つのグループに分けられた。各グループのプレゼンテーションのテーマは試験的に、1）若者文化、2）東日本大震災と復興、3）日本のポップ・カルチャー、4）伝統的な日本文化、とした。

この会合で、学生には、予定されているグループ・プレゼンテーションのすべてのセッションに出席しなければならないことを伝えた。加えて、出発前に練習に割くことができる時間が限られていることから、セッションの練習をアルバイトや課外活動より優先すべきことを強調した。

それぞれのグループにおいてリーダーとサブ・リーダーを選出した。リーダーは国際交流センターと自分のグループのメンバー間の連絡を取り持つこととなった。更に、リーダーとサブ・リーダーはグループのメンバー同士の結束を固めるために協力しあうことが望まれた。グループのメンバーは、プレゼンテーションの練習のための時間を最大限確保するために、各自の自由時間の調整をはからなければならない、とした。振り返ってみると、リーダーの中でも私たちの期待を実行する上で違いが出てきたので、グループのリーダーを選出する際に教員の助言などがあった方が良かったかもしれない。

９．プレゼンテーション練習とその指導（ハヤシ）

このセクションでは、学生がグループとして、及び個人として、どのようにプレゼンテーションの練習をしたかを述べる。まず私たちは、学生が一堂に会する時間を定めた。最初のミーティングは９月26日で（１時間の昼食時）、学生はプレゼンテーションのテーマについて話し合い、その仕上げに取り掛かった。

学生は10月３日、10月10日、10月17日、10月22日、10月24日、10月29日の昼食時に集まり、グループ・プレゼンテーションの練習をした。毎回、２つのグループが選ばれ、他のグループの前でプレゼンテーションを行った。例えば、ＡグループとＢグループが10月３日に、ＣグループとＤグループが10月10日に実演する、という具合である。プレゼンテーションにはパワーポイントを使用し、毎回実演に要した時間を計った。それぞれのグループには、実演後、仲間あるいは出席している教員（熊谷、モリス、木村、ハヤシ、協力者のHelgesen先生）から提案やコメントが寄せられた。いずれのグループにおいても初回と2回目ではプレゼンテーションの質に大きな違いが見られた。最初の回では、グループとしての練習が十分ではなかったのが明らかであった。２回目に練習したときは、スピーカーのスピーカー交代もスムーズで、プレゼンテーションの個人個人の部分については容易に理解できるまでになっていた。

東京での出発に先立つオリエンテーションの前にローラシアン協会に届くように、グループはスクリプトの最終版と、プレゼンテーション用のスライドを10月20日までに国際交流センターに提出しなければならなかった。１つのプレゼンテーションにつきスライドは15枚まで、英語のスクリプトは英語のネイティブ・スピーカーにあらかじめ添削してもらうこと（これは出発前の資料をチェックするブリティッシュ・カウンシルの指示）とされた。各グループにはこれ以前に原稿をチェックしてもらう教師を見つけるようにとの指示があった。

私たちが学生にもっと準備をさせた方がよかったと思われたことがある。学生がこのようなプロジェクトにもう一度参加する機会があれば、以下の点を考慮すべきである。

(1) すべてのグループのプレゼンテーションの練習の様子を最初から最後まで、ビデオに記録すること。今回は出発に先立ってホテルで、及びアメリカで練習セッションをビデオに記録したが、仙台にいる時からそうすべきだった。そうすれば学生は自分達の練習を見て、パフォーマンスを向上させるように考えることができたはずである。

(2) プレゼンテーションのヒント、発音や原稿のチェック等、学生たちがどの教員から何を手伝ってもらえるのか、リストにして明確にしておくこと。人的資源を有効に活用できるように、このリストをあらかじめ学生に与えておくこと。ある教師は学生に、誰かプレゼンテーションを聞いてもらう人が必要かと訊ねたが、彼女はその申し出を断った。学生の中には、スクリプトをチェックしてくれる人を見つけるのが明らかに難しい者もいた。しか

し最終的にすべてのグループが最低一度はネイティブ・スピーカーに原稿をチェックしてもらうことができた。ハヤシは４つのグループすべてのスクリプトをチェックし、直接その電子ファイルに詳細なフィードバックを行った。そのような対応をとれば学生は文法的に適切な、逸脱しない、筋の通ったスクリプトを締め切りまでに提出することができると思ったからだ。不幸にして、リーダーとそのグループ内のコミュニケーションがうまくいかないために個々の学生に添削版が伝わらなかった事態も生じた。学生の中には、国際交流センターにスクリプトを提出した後になって、最終版にフィードバックを受けた者もいた。

(3) 学生全員にプレゼンテーション・スクリプトの音声モデルを持たせること。ハヤシは２つのグループのメンバーに最終的なスクリプトを読んで欲しいと頼まれた。彼女たちはハヤシの声をスマートフォンに録音し、それを聞いて、ポーズ・発音・イントネーション等を真似た。学生の中にはアメリカにいる時でさえもこの練習を続けた者もいる。

これらの反省点はあるものの、積極的に提案やコメントを求め、それらを基に練習にも自発的に取り組んだグループ・個人もあり、その成果は東京でのオリエンテーション期間の発表を含め、渡航中の様々な活動に生かされることとなった。

10.　渡航準備の開始（熊谷・ハヤシ）

具体的な渡航準備は、関係先が多岐にわたるものの、主にローラシアン協会との書類のやり取りにより進んでいった。渡航の準備の殆どを占めるのは必要書類のやりとり作業が中心である。これに関して留意したのは決められた提出期日を厳守するという単純な事であった。この時点では具体的訪問地、訪問先は依然として未判明であった。そのような中で我々の書類提出が遅れれば、国際交流基金や日米のローラシアン協会における、日程調整も困難になってしまうかもしれないという意識であった。学生たちは日程厳守に努めてくれた。これは公的プログラムに参加する場合に大事なポイントと言える。

出発前の一日オリエンテーション・プログラムに参加する必要があったため、私たちは11月１日に仙台を出た。このオリエンテーション会場で他の参加大学（北九州市立大学・神戸学院大学・神戸大学大学院）と合流した。仙台駅からバスに乗り、夕方早くホテルに到着した。日本青年館ホテルでの東京オリエンテーション・プログラムは以下の通りである。

時　間	内　　容
10:00-10:05	日米教育委員会(フルブライト・ジャパン)サミュエル・シェパード事務局長　挨拶（Samuel Shepherd）
10:05-10:10	国際交流基金　川村裕統括役　挨拶（Hiroshi Kawamura）
10:10-10:20	全体行程の概要説明（青少年交流室職員）
10:20-11:20	プレゼンテーションレクチャー(ブリティッシュ・カウンシル　デイビット・クルーズ講師)　（David Cruz） ボディランゲージの使用、メモの使用、声を使ってリスナーを導く、質問の対処の仕方
11:20-11:30	休憩
11:30-13:10	プレゼンテーション・フィードバック　（ブリティッシュ・カウンシル　デイビット・クルーズ講師）（David Cruz） ・参加者を代表した４グループによるプレゼンテーション ・他の参加者のプレゼンテーションを聞き、チェックリストを使って評価する ・グループになってお互いのプレゼンテーションについてフィードバックをする ・講師による個別および全体のフィードバック
13:10-14:00	昼食（机でお弁当を食べる）
*13:40 -14:00	付き添い教職員のミーティング（自己紹介・情報交換）
14:00-14:30	ゲストスピーチ（ジェフリー・アドラー駐日米大使館　文化担当官補） 米国大使館担当官による参加者へのメッセージと質疑応答
14:30-15:00	アメリカのライフスタイル　講義
15:00-15:10	休憩
15:10-16:10	日米関係　講義　（獨協大学　伊藤兵馬先生） 第二次世界大戦頃から現代までの日米両国の関係史について、政治、経済分野のみならず、青少年交流等の文化分野も含め概要について講義を受け、米国での発信の際しての要点や留意点を学ぶ
16:10-16:20	海外旅行保険の説明（Mr. Takigawa）
16:20-16:30	クロージング 質疑応答、明日の予定など
16:30	解散；　宿泊先へ移動

11:30 から13:10までは、参加大学がそれぞれ１つのプレゼンテーションを行い、デイビッド・クルーズ氏からフィードバックを受けた。宮城学院からは４つのグループのうちで最も相互交流的であった「日本人のこころ」を発表するグループを代表とすることに決めた。

プレゼンテーションのリハーサルは主催者が考えたほどにはスムーズに進まなかった。この主な理由はプレゼンテーションをした最初の２つ大学のグループが設置されていたコンピューターをうまく使えなかったことである。学生たちが持ってきたUBSメモリースティックが現地で用意されていたコンピューターでうまく作動しなかったのだ。それで貴重な時間を浪費した。幸いにして、宮城学院の発表は３番目のグルーであり、私たちが使いなれたノートパソコンを会場に持って行っていた。多少緊張した空気にもかかわらず、本学のグループは、プレゼンテーションを上手くこなした。この日プレゼンテーションを行った４のグループの中で、制限時間内に、しかもスクリプトを読んだり、メモを見たりせずにプレゼンテーションを終えることができたのは、彼女たちのみであった。その後、彼女たちはクルーズ氏と北九州市立大学の伊藤教授から有益なフィードバックを受けることができた。

オリエンテーション・プログラムが終わった後、私たちはホテルへ向かった。夕食後、学生はホテルの部屋でプレゼンテーションの練習をした。付添い教員は部屋を回り、ビデオによる練習の様子を撮影した。これにより、学生たちは相互に評価し合い、教員も助言を与え、改善点を確認できた。

翌日、参加４大学の学生と付き添いのスタッフと共に、同じ飛行機で東京を発った。シカゴの空港で、旅行の間ガイドをしてくれる４人のアメリカ人の出迎えを受けた。出発に先立って受け取ったスケジュールは最新のものではなく、米国を旅行中も、しばしばの予定変更に柔軟に対応しなければならなかった。以下に宮城学院のグループの実際の行程を示す。

11/3	シカゴ着 ジョンハンコックセンター シカゴ文化センター リンカーンパーク動物園
11/4	米国オリエンテーション・プレゼンテーションリハーサル シカゴ美術館
11/5	ルーズベルト大学訪問 （プレゼンテーション・キャンパスツアー・交流） ミレニアムパーク
11/6	シカゴ産業博物館 DIRTT (Do It Right This Time) Green Learning Center 訪問 Masuda-Funai 法律事務所訪問 在シカゴ総領事館でのレセプション

11/7	シカゴ発　ロサンゼルス着 Center for Social Justice訪問 (Mine Okubo Exhibition) Youth Opportunity Center （プレゼンテーション・交流）
11/8	リバーサイドシティーカレッジ（RCD） （プレゼンテーション・キャンパスツアー・交流） RCC 学長宅にて茶話会 Arlanza Community Center （プレゼンテーション・交流）
11/9	リバーサイド市観光 （ファーマーズマーケット・Mission Innの見学） お別れバーベキューパーティ
11/10	ロサンゼルス発　サンフランシスコ着 サンフランシスコ観光 （フィッシャーマンズウォーフ）
11/11	スタンフォード大学 （日本語授業参加・キャンパスツアー・交流） サンフランシスコ観光 （ストラバス・ゴールデンゲートブリッジ）
11/12	サンフランシスコ発

11．シカゴ地域活動報告（木村）

シカゴ到着後は、各校に事前に割り当てられた有能で献身的な現地ガイドとコーディネーターらと合流し、盛沢山かつ流動的なスケジュールが始まった。ルーズベルト大学では、全４チームが初めて現地でプレゼンテーションを行った。これは、国際文化（交流）の授業の一コマを振り替える形で行われた。事前に用意されたパソコンでは用意していた動画や画像がうまく表示できなかったこと、慣れない固定マイクで聞き取り難い発表が続いたことなど、多くの反省点が残った。質疑応答も不慣れで、発表後のカフェテリアでの交流も苦労している様子がうかがえた。大学に用意していただいた部屋で急遽「反省会」を開き、プレゼンテーションの質の向上だけでなく、訪米の目的やプロジェクトの使命を再確認した。

参加学生の中にはアメリカばかりか海外を初めて訪れた学生もいたので、シカゴ到着後すぐにジョンハンコックセンター展望台からシカゴの街を展望し、街の鳥瞰図を頭に入れられたこ

とは意味があった。美術館・公園などの施設訪問・地元のショッピングセンターなどでの食事も自分の五感で日本の「外」を体験する貴重な時間となった。体験は認知だけの問題でなく、情意面での成長へとつながるものであることを再認識した。さらに、２つの地元企業訪問（DIRTT Green Learning Center & Masuda-Funai Law Firm）はこのようなプロジェクトでなければ体験できないものであった。これらは、新しいコンセプトと技術で未来の建設のあり方を提案する企業とアメリカへの日本企業の経済活動を支える法律事務所である。学生には近い将来やってくる就職活動を見据えて、職業・業種といったキャリアを具体的に意識させる効果もあった。後者の法律事務所では（プレゼンターを務めてくださった弁護士の先生から促されてではあったが）学生から質問も出て、有意義な訪問であった。質問の意図がなかなか伝わらず苦労しながらも、諦めず自分の疑問をぶつける姿が印象的であった。シカゴ領事館でのレセプションでは、共にKAKEHASHIプロジェクトに参加した他大学の学生や高校生たちとも合流し、積極的に交流する姿が見られた。公的なレセプションも大方の学生が初体験であり、その場にふさわしい服装や振る舞いに関する社会性（社会に生きる大人の常識）を身につける絶好の機会でもあった。

12. 南カリフォルニア地域活動報告（木村）

リバーサイド滞在は、６月に宮城学院を訪れたリバーサイド・シティ・カレッジ（Riverside City College: RCC）の教員・学生との再会を果たし交流を深めたことで今回の行程の中で最も充実したものとなった。この陰には、リバーサイド滞在中の旅程を立てるだけでなく同行もして下さったRCCの Jan Schall氏個人の功績によるところが大きい。また、RCCの他にYouth Opportunity CenterとArlanza Community Centerでも異なる年齢層の聴衆に向けてプレゼンテーションを行い、学生たちの成長を実感することができた。

滞在初日は日系画家Mine Okuboの展示を鑑賞した後、Youth Opportunity Centerに向かったが、同名のセンターが二カ所あり、プロジェクト遂行団体から事前に得ていた情報にも異なる二つの住所が記載されており、到着に苦労した。聴衆に未就学年齢・小学生と思われる子供たちがいたことと時間の制約のため、「日本の若者文化」（Japanese Pop-culture）の発表は酒の話題をカットし、次に「日本人のこころ」（Kokoro: The Japanese Mind）と続け、最後に「現代日本の知られざる魅力」（Interesting Japan）はまとめの部分だけを発表した。「日本の若者文化」（Japanese Pop-culture）の発表では前列に座っていた数名の10代の若者が発表者を揶揄する場面があったが、センターのシニアスタッフが適切に対処しその後は問題がなかった。幸い学生たちは気づかないまま済んでいたように思う。また、用意したプレゼンテーションにその場で若干の変更を加えることもできるようになりつつあったし、日本人聴衆より積極的に関わってくれる地元の人たちとの交流も楽しめるようになってきていた。

RCCではバスの到着後すぐ、再会を喜び合う学生の姿が目立った。到着後すぐプレゼンテーションに入るのではなく、用意していただいていたお茶やお菓子をつまみながら歓談する時間が設けられていた。通常はプレゼンテーションから交流へという流れであったので、RCCでの時間は、この点においても「特別」なものであった。RCCの学生による訪日の報告や武道のデモンストレーションの後、４チームが発表を行った。これが滞在中にすべてのチームがフルで発表できた唯一の機会となった。「日本人のこころ」（Kokoro: The Japanese Mind）では、会場にピアノがあったため生演奏で浜辺の歌を披露することができた。このRCCでの発表がプレゼンテーションとしては最後の舞台となった。どのグループも成長を感じさせる立派な発表となったのは、バスでの移動中も小さな工夫についいて相談し、練習に時間を惜しまなかった努力の成果であった。プレゼンテーションの後、短いキャンパスツアーをしながら学食に移動し共に昼食を取った。RCCの学生と宮城学院の学生たちが和やかに時間を過ごし、バスに乗る際にも別れを惜しみ次の再会を約束する姿が印象的だった。

午後にはRCCの学長宅でのTea Partyに招かれ、歓談の後Arlanza Community Centerに向かった。センターには予定時間より早く到着したため、施設外の公園で時間を過ごした。学生の中には、ヒスパニック系の親子と公園の遊具で共に遊ぶ者もいた。聴衆が予定を大きく超えたため事前にセットアップした部屋から大きい部屋に移動するというハプニングもあった。ここでも子どもたちが聴衆にいたため、発表は「日本の若者文化」（Japanese Pop-culture）の発表は酒の話題をカットし、「日本人のこころ」（Kokoro: The Japanese Mind）の浜辺の歌の箇所のみ、「東日本大震災」（The Great East-Japan Earthquake in 2011）「知られざる日本の魅力」（Interesting Japan）と通して行った。ここでもピアノがあったので、生演奏で浜辺の歌を歌うことができた。その後の交流では、麻薬使用のことなどプレゼンテーションの内容以外の質問も出て、活発なやりとりとなった。聴衆の中には小さな子どもを連れた母親も見られた。さらに、宮城学院の学生の一人がダンスを披露し、それに続き地元の小学生も数人でダンスを踊って盛り上がった。プレゼンテーションの開始が部屋の移動で遅れたこともあり、時間を押して出発することになった。

夜はRCCで演劇を学ぶ学生の舞台を観た。キャストだけでなく、すべてを学生自らが運営している。文学・演劇を学ぶ学生には特に貴重な時間であった。

リバーサイド最終日は地元の生産者の集まるファーマーズマーケットとランドマークとなっているMission Innを回り、RCCで行われていたマーチングバンドの大会を観戦した。大会のハイライトは国外にも遠征して活躍するRCCのマーチングバンドのパフォーマンスであった。姉妹都市である仙台から本学の学生が訪れていることがアナウンスされ、私たちは立ち上がって拍手にこたえた。夜は地元の学校で副校長を務める方のお宅にバーベキュー・パーティに招かれた。ご夫妻は同年代の若者も数人招いてくださり、プレゼンテーションの重圧から解放さ

れて、学生たちにはリラックスできる時間となった。食事の機会を提供していただいただけでなく、様々なもてなしを受けた。学生たちがピアノを弾き始めたら、婦人がわざわざ古い楽譜を探し出してきてくださった。宮城学院の学生はダンスを学べるウェブページを使って、地元の若者にダンスを教えて楽しんだ。また、音楽を聞きつけた日系の老婦人が階下に降りてきて、学生たちに昔話をしてくださった。

これらは米国ローラシアン協会のJan Schall氏が学生たちに最善のもてなしをと考え、様々な人々の協力を得て実現したものばかりであった。日米両政府の合意のもとに国際協力基金も関わったプロジェクトであったが、最終的にはJan Schall氏をはじめとする個々の人々の努力と労力と善意に支えられたものであった。「おもてなし」は決して日本に特有の文化ではなく、他者を敬う心から生まれる普遍的なものである事を学生たちと語り合った。

13. 北カリフォルニア地域活動報告（木村）

最後の訪問地カリフォルニアでは、スタンフォード大学を訪問した。スタンフォードでは、学生たちが二つのグループに分かれ、日本語の授業に参加した。授業は自己紹介･大学の紹介･大学のイベントというトピックで、英語・日本語と交互にサポートし合い教え合う形で進んだ。次に、日本のテレビコマーシャルを使い、日本語部分は地元の学生がディクテーションに挑戦し日本人学生がそれをサポートする、英語部分は日本人学生がディクテーションに挑戦し地元の学生がそれをサポートする、という構成で行われた。綿密に練られた授業計画で、交互に学び合いながらも、地元の学生には既習事項を復習させながら、日本人学生には負荷をかけすぎないという配慮がなされていた。この授業はどちらの学生たちにとっても学びの場であり、学習中の言語を実際に用いてコミュニケーションを取る貴重なチャンスであった。このことは、授業後のキャンパスツアーにも同行してくれたり、カフェテリアでの昼食を共にしたり、バスまで見送ってくれたスタンフォードの学生が少なからずいたことからも理解できる。宮城学院の参加学生の中でも英語の技能には個人差があったし、スタンフォードの学生にとっても（程度の差はあっても）同じことが言えると思うが、誰もが時間をいっぱいに使って目標言語でのコミュニケーションに「のめり込む」ほどであったことは目を見張るものであった。

授業の構成が自分の学習中の言語を使い、相手の学習を助けるよう巧妙に仕組まれていたことは言うまでもないが、この授業が訪問の前半に行われていたら宮城学院の学生たちがこのようにスムーズに教室活動に入っていけたかは疑問である。東京でのオリエンテーション・シカゴ・リバーサイドでの経験があったからこそ、この授業での学びが最大の効果を引き出せたと考える。

この最後の訪問地サンフランシスコでは４大学の現地グループ・コーディネーターと国際交流基金の引率者と共にバスで移動し、フィッシャーマンズウォーフ・ストラバス・ゴールデン

ゲートブリッジを訪れ、旅の終わりを惜しんだ。

14. 帰国後の第一回報告会（モリス）

2013年12月７日（土）に、大学のオープンキャンパス行事にあわせて、KAKEHASHIプロジェクト参加者の帰国報告会を行った。対象となったのは、オープンキャンパスに訪れてきた高校生とその保護者が中心であった。

報告は、時間の関係上、KAKEHASHIプロジェクトに参加した４チームの内の１つだけであったが、来場者は、60名以上となった。引率者がKAKEHASHIプロジェクトの概要を説明した後、学生６人で「日本のこころ」について英語と日本語で発表した。発表した学生は、国際文化学科や日本文学科のほか、音楽科生２名、発達臨床学科来生および日本文学科１名ずつの混成チームであった。発表と一緒に、自分たちの発表を米国人がどのように受け止めたかということを説明するチラシを用意し、アメリカ人にとって「意外」に映った要点をわかりやすく説明した。

来場の高校生は、異文化理解について学生が伝えたかったことに注目するよりも、将来、自分もこのように英語を使って人前でいつかは話せるようになりたいという夢を発表者に託して、熱心に聞き入っていた。こういう意味では、この発表会は、間接的にではあるが、高校生に自分の英語力に対する自信と国際交流に対する意欲を高めるよい機会となったように思える。

15. 第２回報告会（モリス）

さらに2014年１月16日に、学内で第２回KAKEHASHIプロジェクトの帰国発表会を行った。学外者にも広く参加を呼び掛けたが、来場者は、地元の新聞社の記者の他、殆ど学内関係者（学生及び教員）であった。

引率教員による概要説明の後、日本・宮城の魅力を伝えるプレゼンを行った学生４チームのうち、「日本人のこころ」について発表したチームが、英語でプレゼンテーションを披露し、アメリカ人がどこに共感と興味を示したかという解説を行った。続いて、他の３チームのメンバーが自分たちのプレゼン内容の概略と、自分たちがアメリカで何を学んできたかなどについて、今回の渡米の成果について多面的に発表を行った。参加者の発表からは、個別具体的ではあるが多様な体験を通して、アメリカの社会に対する理解が漠然とした抽象的なものから、人間の顔とその営みが具体的に見えてくるものに明らかに変化していたことがみえてきた。

以上のように帰国発表会を実施してKAKEHASHIプロジェクト参加の成果を広く社会に還元しようと努めた。大学のウェッブサイトを通して一般に両度の発表会を告知したほか、地元のメディア各社にもプレスリリースを届け、また地元町内会を通して一般の参加を呼びかけるなどして広報に万策を尽くしたが、その反響が限定的なものにとどまったのが現実である。

その反面、プロジェクトに参加した学生は、ブログなどのソーシャルメディアを通して自分の体験をリアルタイムで発信したこと、また、帰国後、アメリカでできた新しい友人にも引き続き連絡を取り合っていることは、帰国後のアンケートで明らかになった。ソーシャルメディアによるこのような情報発信の成果を把握することは難しくその評価について判断するのは早計であるが、そこに大きな可能性が秘められているように思える。

16. KAKEHASHI プロジェクト参加の意味・意義（木村）

ここでは、参加した学生たち自身がこの経験をどのようにとらえているかを、まず、彼女たち自身の言葉で紹介する。次に出発前の事前指導で英語の添削・プレゼンテーション指導に関わった教員と第二回報告会に参加した教員が学生の成長という観点からプロジェクトを振り返る。

まず、学生から見たプロジェクトの意義・意味については、でけるだけ重複した内容を避け、(1)現地の学生との交流について (2)プレゼンテーションについて (3)プレゼンテーションの内容について (4)プロジェクト参加の意義について (5)KAKEHASHIの意義について (6)日本文化の再発見について (7)職業感について (8)将来の可能性について (9)アメリカで働く日本人について (10)共に参加した仲間たちとの交流について (11)帰国後の活動について、という11の項目に関して、一人ずつ以下に引用する。

(1) 現地の学生との交流について

スタンフォード大学で出会った学生のことが心に残っています。彼女とは昼食を一緒に食べてから帰るまでずっとしゃべっていました。彼女は日本のことをよく知っていて、知っている日本語はあるかと尋ねると暴走族と言っていました。日本の漫画に載っていたと言っていました。彼女は私が帰るバスのところまでついてきてくれました。私たちの話は尽きることはありませんでした。今年また彼女に会いに行きたいと思います。

(2) プレゼンテーションについて

アメリカでの初めてのプレゼンテーション発表の際、緊張と声量に注意を取られ、発表内容を忘れてしまいました。人前で発表することに慣れておらず、緊張していました。しかし、回数を重ねるうちに何とか発表にも慣れていきました。現在、人前で話すことには未だに慣れず緊張しますが、授業などでは、以前よりも自信を持って発表することができるようになり、自分を見直すことができる機会になりました。

(3) プレゼンテーションの内容について

自分のプレゼンテーションを通して震災の被災者の１人として、日本の現状や立ち上がろうとしている日本人の姿勢を伝えることができました。初めは上手く伝わらず悔しい思いをしましたが、英語を話すことは上手じゃなくても伝えようとする気持ちが大事だと学び、気持ちをこめてプレゼンテーションしたところ、学生から日本に対して僕たちができることは何ですか？と聞かれた時はこのプロジェクトに参加して良かったと実感できました。

(4) プロジェクト参加の意義について

アメリカでの出会いをきっかけに自分で自ら知りもしない世界に壁をつくっていたことに気がついた。日本にいると「あらゆる情報を手に入れられる環境にいる」という錯覚に陥ってしまい、見えているようで見えていなかったのだと分かった。“百聞は一見に如かず”これが、私の最大の報酬であった。これからは、自分で感じたもの、見たものを大切にしていきたいと考えている。

(5) KAKEHASHIの意義について

（わたしが出会った）この方は、転々と環境が変わろうとも愛するご主人と二人三脚で生活してこられたのだと思いました。83になっても変わらず旦那様を良い人だと言えるなんて、なんて乙女で素敵なのだろうと思いました。 私はxxxさんとの出会いによって、チャレンジ精神、また一人の人を愛する事への誇りを学ばせていただきました。ご高齢の方の話はその分内容も濃く厚く、様々なエピソードから多くを学べると思います。私は外国人に限らず沢山の人の話を聞くことによってその方とのカケハシを繋いでいきたいと思いました。

(6) 日本文化の再発見について

プレゼンを見たアメリカの人々の反応には、予想外なものもありました。予期せぬ笑いが起きたり、私たちが当たり前と思っていることに興味を示してくれたり。そのように、現地の人々の反応から、私たちの方が日本の新たな魅力に気づかされ、現地の人から日本の文化について質問されることで、私たちが当たり前だと思っていることが実は、日本特有の「当り前」であるということを学ばされました。異文化交流としての経験のなかに、自国文化の再発見が生まれ、本当に有意義な体験となりました。

(7) 職業感について

私は今回のプロジェクトを通して、沢山のものを見て、感じて、得ることができました。そして将来、私達のような学生をもっと増やしていけるような仕事をしていきたい、という道筋

を見つけることができました。

(8) 将来の可能性について

このプロジェクトに参加して、多方面から物事を考えられることを学びました。進路を考えること一つ挙げても、今までは日本で就職したり教採を受けたり、としか選択肢がないと思ってしまっていました。ところが、視点を世界に広げてみると、日本以外の国で先生になることや、日本人であることを生かして外国で仕事をするなど、発想を変えれば無限に働き方があることに気付きました。

(9) アメリカで働く日本人について

大学や施設で日本人の方が働かれていたのをみて、日本人が様々な場所で活躍していることが刺激になり誇りに思えました。

(10) 共に参加した仲間たちとの交流について

アメリカと日本との橋をかけることがプロジェクトの目的でした。しかし、このプロジェクト自体に私達が日本人同士の新しい橋をかけてもらう手助けをしてもらっていたことをとても感じました。それぞれの環境の違いによる視点や考え方の違い。日本人同士なのに、だからこそ、面白い人達と巡り合えた、と感じたと同時に、今までの友人たちとは違う、特別な存在となりました。

(11) 帰国後の活動について

できない/できるではなく、できないかもしれないけど挑戦してみる。精一杯やってみる。という考え方になったことです。私はアメリカ帰国後、ボランティアでアメリカ人と小学校に行って通訳者の役割をするというボランティアをしました。以前の私だったら、確実に挑戦はしていませんでしたが、私は挑戦し、完璧ではなかったかもしれないけれど、やり遂げることができ、とても新鮮な気持ちでした。

次に出発前の事前指導で英語の添削・プレゼンテーション指導に関わった教員は第二回報告会に参加し、学生たちの成長を以下のように観察している。

> 出発前はプレゼンテーションの構成も未熟であり、グループとしてのまとまりにも欠いたが、参加後には聴衆とのやりとりができるようになり、自分の言葉で語りかけ、グループの全体像の中で自分の役割を理解して行っていたため、聴衆も聞いていて発表の内容をよく理解し楽しめるものに仕上がっていた。このようなプログラムの教育的価値

は大きいに違いない。

また、授業を通じて参加学生の一部を指導している教員は、３年次でこのプロジェクトに参加した学生について次のように述べている。

（この学生は）常に私に自分の英語力不足について、不安をぶつけ続けていた学生であった。授業終了後にはいつも「英語がわからない」「自分はダメだ」と言う彼女を常に励まし続けた２年間であった。彼女はそうは言いながらも、決してあきらめることなく、自分の夢を追求するために自分なりに努力をしている姿も見てきていた。（中略）彼女の英語での発表を聞き、まず何より感動した。自信を持って、英語で発表をしていたこと。原稿の棒読みではなく、英語を使って自分の伝えたいことを伝えようという強い意志が感じられ、実際発音もとても綺麗で、非常に聞きやすい発表となっていた。今までの彼女の努力が、この英語でのプレゼンテーションを通して、見事に開花したように感じられた。彼女の姿を通して、是非多くの学生たちにもこのような機会が与えられれば良いと思った。

これら学生自身の分析と学生たちの成長を見守った教員の観察を受け、次に引率者として直接かかわった教員から見た学生たちの成長報告に移る。

17. 学生の成長の軌跡（ハヤシ・木村）

私たちはアメリカにおけるKAKEHASHI プロジェクトの活動の過程で、学生の変化を観察した。多分、目に見える最も大きな変化はプレゼンテーション技術の向上だろう。第二次審査での５分間のプレゼンテーションの時には、明らかに神経質になっている学生もいたし、また事前に練習を最低限の努力しかしていないように見えた学生もいた。また他には、予期しない出来事にどう対処してよいか分からない学生もいた。（セクション５を参照。）全４グループがルーズベルト大学で、最初のパブリック・プレゼンテーションをした時、学生は部屋のレイアウトと器材の設置状況に驚いた。ワイアレス・マイクではなく、教壇に固定されていたマイクであり、部屋のコンピューターは、学生のUBSメモリースティック内のすべてのデータに対処できるわけではなく、縦長の部屋で、後ろの列の人にまで声を届かせデモンストレーションを見てもらうことは困難な会場であった。後に、ルーズベルト大学を出る前に空き教室を借りることが出来、プレゼンテーションの反省会を開いた。そのような機会があり、学生はお互いにフィードバックをした。グループ全体として行った最初のプレゼンテーションは満足のいくものからは程遠いものであった、という事実は多分結果的には良いことだったのだろう。学生は

失敗から何かを学び、その後のプレゼンテーションは回を重ねるに従って上手くなったのだから。その日以降、学生は発表が上手くなるように練習した。スクリプトを見ないで自分のパートを言う猛練習をして、ボディ・ランゲージを向上させるように努め、発音とイントネーションを勉強し、１人の話し手から次の話し手へスムーズに移行するように工夫した。加えて、グループ内のメンバーは、セリフを度忘れした人を助けることができるように、他のメンバーが話す内容をも覚えるように指導した。リバーサイドでの最後のプレゼンテーションまでには、学生はとてもリラックスして、観客と本当に「繋がる」ことができているように見えた。

学生たちは相互交流においても成長した。時間の経過につれて、またアメリカ人と話す機会が増えるにつれて、初対面の人とのコミュニケーションがより容易に、流暢になっていったのは驚くことではない。学生はまた、話しかけられるのを受身で待つよりも、自分からイニシアティブを取って会話を始めるようになっていった。同時に学生は、新しいアメリカ人の友人ばかりではなく、将来における見知らぬ人ともより良いコミュニケーションができるように、自分たちの英語の能力を向上させる必要性をひしひしと感じるようになった。

その一方で、学生の成長には差も見られた。渡航前の準備段階から渡航中の練習、帰国後の報告会まで、それぞれにいかに真摯にプロジェクトの活動に取り組んだか、自分のパフォーマンスをどれほど客観的に見て振り返ることができたか、教員などから与えられる示唆などをいかに誠実に受け止め改善に生かす努力をしたかなどが、プレゼンテーションの技術の向上と相互交流の豊かさの両面において大きな差を生んだことは明らかである。

次に、学生はより批評的な目で物事を見るようになった。KAKEHASHIプロジェクトの間、学生は多くの人と出会い、話をして、またアメリカ文化を観察する多くの機会を得た。学生は自分たちが持っていたアメリカのイメージが全体のほんの一部分を切り取ったものでしかなく、時にはそれがただの固定観念であることを認識した。さらに、逆もまた真であることにも気づいた。つまり、アメリカにおける日本のイメージは、時として単なる固定観念の場合がある、と。

さらに、学生たちは新たな状況に適応する力を身につけた。あるいは、その必要性を体験により学んだ。未定が目立つ行程表の記載、聴衆などの情報不足、さらに直前の予定変更など不確定要素ばかりのプロジェクトにおいて、その場で臨機応変に対処する、聴衆の反応で微妙にプレゼンテーションを調整するなど、柔軟な対応が求められた。英語がグローバル言語となった今、その英語を学ぶということは特定の英語圏の文化を知るだけでは不十分になりつつある。むしろコミュニケーションする相手や状況にケースバイケースでいかに適切に対応し、異なる文化や考え方・新たな視点を受け入れ、相手の視点に立って物事を見て考え、その場に相応しい行動をとる資質が求められている。アメリカと日本の二国間関係を若者の交流を通して促進する目的で始まったプロジェクトであったが、この第一義的目的を超えた成果があり、貴重な

副産物となったことに確信がある。

最後に、他大学の引率教員や現地ガイドから宮城学院の学生たちは元気が良いとの感想を複数いただいた。唯一女子大としての参加ということもあり、確かに共学で学ぶ他大学の学生たちの様子とは少し違った。いわゆる「女子大力」とは何なのだろうか、女子大で四年間学ぶことの醍醐味はどこにあるのだろうなどと、とりとめもなく考えた。様々な面で成長してゆく学生たちを目の当たりにして、教室やカリキュラムの枠の中でしか知らない学生たちの潜在的な力や内に秘めた可能性を、実は今まで見逃していたことに気付かされた旅でもあった。旅の行程が終了し、公式の報告会も終えた今、この学生たちが今後どのような大学生活を送っていくのか、国際交流などの活動にこれからも積極的に関わっていくのか、就職活動にどのように取り組むのか、その後の人生をどう歩んでいくのか、KAKEHASHI プロジェクトに共に参加したものとして期待を込めてサポートを続け、見守っていきたいと考えている。そのための、未来志向のプロジェクトであったのだから。

（2014年4月14日受領、2014年5月12日受理）
（Received April 14, 2014; Accepted May 12, 2014）

付録：学生参加者

学　科	学年	名　前
国際文化学科	1	堀　籠　莉　奈
国際文化学科	2	佐　藤　美　咲
国際文化学科	2	加　藤　萌　子
国際文化学科	2	岩　川　咲　也
国際文化学科	3	渡　邉　　舞
国際文化学科	3	佐　藤　さやか
国際文化学科	4	齋　　めぐみ
国際文化学科	4	江　刺　里　奈
発達臨床学科	3	菅　原　春　花
音楽科	2	伊　藤　真　帆
音楽科	3	宮　城　諒　子
日本文学科	2	折　笠　芽　衣
英文学科	1	桔　梗　可　菜
英文学科	1	丹　治　瑞　穂
英文学科	1	浅　場　理　佳
英文学科	2	我　妻　美　穂
英文学科	2	黒　石　めぐみ
英文学科	2	太　田　帆　南
英文学科	3	菅　野　　恵
英文学科	3	佐　藤　由　紀
英文学科	3	緑　川　香　奈
英文学科	3	安　住　冴　絵
英文学科	4	鈴　木　彩　佳

注：記載の学年は参加年度のものです。

謝辞

この報告書を書くにあたり、国際文化学科のMarc Helgesen先生、国際文化学科非常勤講師の杉山恵先生に貴重なご意見を伺いました。この場を借りて、お礼申し上げます。

The Bridge for Tomorrow: Miyagi Gakuin and the KAKEHASHI Project

Twenty-three Miyagi Gakuin Women's University (MGU) students were selected to go to the USA as members of the government-sponsored KAKEHASHI Project (The Bridge for Tomorrow) in November, 2013. After a one-day briefing session in Tokyo prior to departure, the group spent the next ten days in three different American cities, where they gave presentations about Japan and interacted with the local residents. In addition to the presentations in the USA, the participants gave a demonstration of one of their presentations and spoke about their experiences to the general public after returning to their University in Sendai. This report describes MGU's participation in the KAKEHASHI Project --- from hosting American students in March 2013 to the public address by MGU students in January 2014 --- and illustrates how the project affected the participants. It is hoped that this record will serve as a guide and/or springboard for others should a similar opportunity present itself. In addition, the record will demonstrate that the short duration spent in the USA acted as a catalyst for the variety of transformations among the young women.